

編：花輪 壽彦
漢方処方ハンドブック

書評者：田原英一（飯塚病院東洋医学センター漢方診療科部長）

漢方界で北里大東洋医学総合研究所の花輪壽彦先生を知らない人はいない。いわゆる「レッスン」書^註で漢方に引き込まれた者は枚挙にいとまがない。その花輪先生が日本東洋医学会学術総会の初学者向け「漢方入門セミナー」の「補助テキスト」と企画されたのが本書であるという。否、これは「補助」などという手ぬるいものではない。北里東医研の、花輪流の奥義書である、と私は感じた。以下にどうしてそのように感じたかを記す。

漢方の基本概念が極めて簡潔に記載されているその直後に、いきなり「Advanced Course」として、切診の極意が記されている。続いて畳み掛けるように「全身症状のとらえかた」が記されているが、私は個々の症状・症候をどのように解釈するかを、ここまで丁寧^註に記した臨床主体の本をほとんど知らない。しかも八味丸で食欲改善なんて……知らなかった。初学者には難しい面もあるが、中級者から上級者は大いにうなずくであろう。

「処方の実際」が本書の中心であり、40の項目に関して、全身、全年齢の症状・症候に対応している。入門書であればエキス剤にあるものが中心になりそうだが、レアな処方まで当たり前のように鑑別に挙げられ、こんなに鑑別があ

ったら混乱するのではという心配を持ったが、虚実の証で分類し丁寧^註に解説している。その一方、小児の「証」を考慮しなくてもよく効く処方」には度肝を抜かれた。この柔軟さは何なんだ？ また、そこまで書くのだ、と驚いたのが「婦人科三大処方が無効なとき、副作用が出たときの対応」である。基本と応用が変幻自在にちりばめられている、この懐の深さも本書の特徴ではないだろうか。

本書の各所にちりばめられた「column」にも注目したい。私が特に感心したのは、「漢方治療における上級者」「消化器と不眠」「慢性副鼻腔炎の寒熱」などである。時には症例報告、時には臨床のこつ、時にはEBM、時には主張。「column」は少なくとも40以上。漢方上級者をめざすには全項目読破をめざすのが捷徑であろう。上級者向けの「Advanced Course」も20以上。エキス剤にない処方をエキス剤を組み合わせる方法が参考になる。上級者でも飽きない。

後半に生薬に関連するドーピングや副作用のまとめ、ミニマムな鍼灸があり、コンパクトな医史学は専門医をめざす人たちの勉強の材料として、多すぎず、少なすぎず、ちょうど良い量と質である。裏表紙を開くと漢方関連年表があり、専門医受験には大いに重宝す

るであろう。

実は本書の「キモ」は最後に鎮座する「あとがきにかえて」である。ここには「あの処方」が全方向から詳述されている。「ボランティア活動ができない」には笑った。しかし、あとがきなのに一度くらい立ち読みしても頭に入らないくらいの分量だ。

一つ二つ、本書へ不満を述べたい。まず、文字が小さい！ その上500ページ近いボリュームは50を超えたおじさんの眼では読破に10日を要した。次に、われわれが実践している飯塚病院風のところがない！ 当たり前だ。王道が記載されている。よほどの寒冷地でなければ附子の使用は少なめにと、学んだ。少なめにと記載しておきながら、この『漢方処方ハンドブック』は「漢方の臨床を極めようとする者には、量、質ともに十分すぎる！！」と私は声を大にして申し上げたい。

註）『漢方診療のレッスン』のこと。増補版が2003年に金原出版から刊行されている。

●B6変型 頁488 2019年6月
定価：本体3,800円＋税
[ISBN978-4-260-03914-7]
医学書院刊